

国際協働によるスクールカウンセラー教育の試み

：ニューヨーク工科大学との多文化理解のための共同授業

伊藤 亜矢子 お茶の水女子大学基幹研究院

Carol Dahir New York Institute of Technology

要約

スクールカウンセラーには、学校現場に即応した実践の知が求められる。特に今日では、チーム学校や多文化社会などを背景に、ますます多様な知識技能が求められ、養成教育の工夫も重要と考えられる。そこで筆者らは、米国でスクールカウンセラー養成の認証コースを持つニューヨーク工科大学と臨床心理士・公認心理師養成プログラムを持つお茶の水女子大学の共同授業として、学校現場における多文化理解と子ども支援を内容とする授業を、2016年と2018年に行った。本稿では、それらの講義内容について報告し、スクールカウンセラー養成について示唆を得た。

キー・ワード：スクールカウンセリング、スクールカウンセラー養成、多文化理解、国際協働

I プログラムの理念と経緯

スクールカウンセラー（以下 SC）には、個別カウンセリングの力だけでなく、学校現場で教師と協働するための知識技能等が幅広く求められる。

例えば、米国でカウンセリングおよび関連領域における養成教育の基準提供と認証等を行う Council for Accreditation of Counseling and Related Program (CACREP) では、スクールカウンセリング領域の入門教育として、(a) スクールカウンセリングの歴史と発展、(b) スクールカウンセリング・プログラムのモデル、(c) P-12 の包括的キャリア発達モデル、(d) 学校ベースのコラボレーション、コンサルテーションモデル、(e) P-12 の教育に特化したアセスメント、を基礎に、カウンセリングだけでなく、システム変化や多職種チーム、保護者コンサルテーション、危機対応等の多様な側面での SC 役割の理解や、スクールカウンセリング・プログラムのデザインや心理教育等が実施できる力量養成を、SC 養成教育の必

須項目として示している (CACREP, n.d.)。

本邦では、臨床心理士・公認心理師ともに領域横断的資格であり、SC に特化した大学・大学院教育における認証プログラムではない。一方で、学校現場で求められる知識や技能は幅広く、他領域と本質的技能は共通とはいえ、学校現場に特化した具体的な実践を学ぶことで理解できる事柄も多いはずである。上記 CACREP では最低 48 単位 (2020 年以降は 60 単位) の SC に特化した学びを標準としている。それだけの学びが本来は SC 実践に必要ななら、2~6 単位ほどの学校臨床関連の授業で何をすべきか。不足を他の科目等でどう補うか、相応の工夫が必要である。しかもチーム学校やいじめ予防など、学校現場で SC に求められることは増加している。それらにも対応できる SC 教育を考えることは重要である。

ところで、こうした養成の問題を考える上では、先のような SC 養成システムがある程度標準化されている国の工夫を学ぶこともひとつの方法であ

ろう。SC 活動は、国や地域の教育政策と結びついて、国による差もある一方で、学校という場での子どもの課題や、学校という場での支援には共通点もある。SC 活動や SC 養成の工夫には、国を超えて相互に学ぶべきものがあると考えられる。

特に米国では、米国 SC 協会 (American School Counselor Association: ASCA) が、SC 活動の概要を示すモデル (ASCA モデル) や、必要なスキル等について、多くの資料を SC に提供し、大学院では CACREP の認証を受けた SC 養成コースが多く of 大学院に設けられている。本邦に不足している体系的な SC 教育という点で興味深い。

そこで第一筆者は、SC 教育に長く携わり (Stone & Dahir, 2016) ASCA で主導的な立場にある第二筆者と交流を重ねてきた。その際、2016年夏と2018年夏の2回にわたり、所属するニューヨーク工科大学 (以下 NYIT) 大学院 SC 養成コースとお茶の水女子大学大学院発達臨床心理学コースの共同授業の機会を得た。

NYIT の大学院 SC 養成コースは、CACREP の認証を受け、第二筆者を中心に、主にニューヨーク市及び周辺で働く SC の養成を行っている。

ASCA モデル 3 版 (現在 ASCA では 4 版に移行中) では、多文化カウンセリング理論や多文化コンピテンスを習得し、多文化社会や多文化な文脈を踏まえた活動計画等を行うことが必要とされている。そのため SC 養成においても、多文化理解スキルを養う科目が必須とされており、NYIT では、後述の多文化コミュニティを訪れる科目と、多文化理解のイマージョン教育として海外で行う授業科目の2つが開設されていた。筆者らは、後者の「教育カウンセリング 683 番: グローバルコンテキストにおける多文化主義とカウンセリング (EDCO 683 Multiculturalism and Counseling in a Global Context)」という授業を、お茶の水女子大学 (日本) で行うことを考えた。第二筆者は、米国の SC 教育との交流は今後の日本の SC 活動や SC 養成にも示唆を与えるであろうし、地域社

会の多様化は日米ともに増加の一途であって、多様な文化的背景を持つクライアントとのカウンセリングに必要な知識や技能を獲得することは、双方の学生にとって重要と考えた。また NYIT 学生にとって海外での学習では、人種的・民族的・文化的・宗教的・教育的な特徴をその文化に浸ることで体験的に学べる。日本での開催であれば、アジア文化圏において、ジェンダー・性志向・宗教・社会経済的地位や能力・障害などの幅広い多様性がどのような影響を持つかを探求し、地域の施設において多様なアジア文化に出会える。これらを、第二筆者は当該科目の目的とした。

一方、第一筆者が所属するお茶の水女子大学の大学院人間文化創成科学研究科発達臨床心理学コースは、臨床心理士資格認定協会の第一種指定校であるが、旧家政学部児童学科の伝統もあり、福祉・教育分野での子ども支援を目指す学生が比較的多い特徴があった。教育センターの心理相談員や SC を修士修了後の進路とする学生も少なくない。SC をめざす NYIT 学生との交流を通して、米国での子ども支援について生の声を聴き、NYIT 学生と共に子ども支援の場に赴いたり、支援の可能性について考えたりすることは、今後子ども支援を行う上でも、多文化理解という点でも、学生にとって貴重な学びの機会になると考えた。さらに NYIT との共同授業であれば、米国での大学院教育の一端を、国内にいながら体験できる利点もある。

第一筆者は、「学校臨床心理学特論」「コミュニティ心理学特論」などの授業を大学院で担当しており、2016年度は「コミュニティ心理学特論」また2018年度は「学校臨床学特論」を NYIT との共同で行うこととした。後述のように都内の多様な文化的地域をめぐる2016年度のプログラムは「コミュニティ心理学特論」、SC 活動等についての発表を中心とした2018年度のプログラムは「学校臨床心理学特論」とし、共同授業の正規履修で、お茶の水女子大学学生は、それらの科目の単位を

取得でき、NYIT 学生は、NYIT から上記 EDCO683 の単位が取得できる仕組みである。

なお、2016 年夏の共同授業では、NYIT 学生の受け入れに当たり、日本学生支援機構（以下 JASSO）の“協定受け入れ”による資金援助を受けられることもできた。NYIT 学生各人に奨学金が授与される制度である。この制度の条件として、日本語教育講座やレポートの提出、日本人学生との交流などがあり、2016 年度はそれらも行った。

本稿では、これら 2016 年夏と 2018 年夏の共同授業について報告し、今後の SC 養成への示唆を得ることを目的とする。

II プログラムの実際

1. 2015 年夏のプログラムからの示唆

2016 年夏のプログラムに先駆けて、2015 年夏に、NYIT で第二筆者らがマンハッタンと周辺で行った多文化スキル育成の授業に、本学の大学院生 3 名と第一筆者が参加した。その概要は別途報告したが（伊藤・初澤・宮部・菖蒲・Dahir, 2016）、多文化コミュニティであるニューヨーク市の特長を活かして、ヒスパニック、ユダヤ、イスラム、ブラック、中国などのコミュニティを訪れ、当地の支援者や当事者から、支援やニーズについて講話を聞き、見学や現地での食事などを通して、各文化を体験するものであった。それぞれに異なる文化を味わい、多くの場合そのコミュニティの出身者である支援者から生の声を聞くことは、生きることを通して刷新され、産み出され続ける文化を、肌で感じる経験であった。また、多様な文化的背景を持つ参加者との交流からも文化的体験を深められ、日本人すなわちマイノリティとして街を歩くことも異文化体験になった。

このニューヨークでのプログラムを踏まえて、2016 年夏のプログラムの要件として、以下を考えた。(a) 東京の多様な文化的コミュニティを訪問する、(b) 各コミュニティで、単なる見学でない本質的理解に繋がる経験ができる、(c) NYIT 学

生には東京滞在そのものが異文化体験であるから、日本の文化的理解が深まる、(d) 準備期間が短く初回なので、多数の多様なコミュニティを訪問できなくとも、地形や歴史的な発展など東京を理解できる要素を盛り込む、各点である。これらは、お茶の水女子大学の「コミュニティ心理学特論」にも適した内容と考えた。

私立学校進学者が多い都心、江戸情緒を残す下町、新住民の多い臨海地区など、都内の地域特性は様々であり、それらを背景に、公立学校には、地域の期待を背負っての事情や地域の実情を象徴する子どもたちの支援ニーズがある。2016 年夏のプログラムでは、お茶の水女子大学からアクセスしやすい地域を中心に、外国人コミュニティや地域特性が顕著な地域、日本や東京の歴史を感じられる地域・施設などをピックアップし、歴史を縦軸、地域を横軸とした後述のようなプログラムを考案した。文化施設見学には、事前の予約や打ち合わせ、料金の問題などがある。マンハッタンでの NYIT プログラムでは、何年もかけて充実させてきたとのことであり、同様の充実は、初回では限界もあると考えられ、かわりに歴史を軸とすることで、現在の東京の学校や子ども、教師や SC との交流が、その背景となる歴史的・文化的な理解との繋がりによって深まることを意図した。

2. 2016 年夏のプログラム

2016 年夏に行ったプログラムは、「SC の多文化コンピテンス」を主題に、多文化について、地域をめぐり歴史を感じることで、文化の形成過程や個人への影響を理解し、日本の文化や現代社会が子どもに与える影響を理解することで、多文化コンピテンスを得ることをねらいとした。

具体的な授業の概要は表 1 の通りである。この他、日本人学生が教師・チューター役となつての日本語レッスンや、「日本の学校制度」「日本の学校文化」「女性の就労」「少子化」などからテーマを選んで日本人学生が 5 分程度プレゼンする時間、

表1 2016年夏プログラムの概要

日にち	講義テーマ	概要
初日	学校と昭和の歴史	公立中学校訪問, 靖国神社, 昭和館, 皇居見学
2日目	多文化理解の必要性	Dahir 教授公開講演, 日本のSCとの交流
3日目	現代日本理解: 現代日本の労働市場とキャリア教育	リクルートワークス研究所訪問, 東京駅周辺ビジネス街見学, 上野公園博物館見学
4日目	江戸から明治, 現代の子ども若者	江戸東京博物館見学, 浅草〜御茶ノ水〜本郷界隈(含む湯島天神) 散策, 青少年プラザ訪問(中高生との交流)
5日目	日本のしきたりと世代差	日本の結婚と家族の世代間格差(ゲストスピーカー講演), 茶室での茶道体験
6日目	多文化な今日の日本	しんじゅく多文化共生プラザ訪問, コリアンタウン・ムスリムタウン散策

全員で感想等を共有する時間などを学内で行った。日本人学生は興味のある日だけの聴講参加も可とし、2日目と3日目の公開講座・リクルートワークス研究所による講義・見学は自由参加とした上で、4日間各4コマの集中講義とした。

以下日毎に、プログラムの概要を報告する。

1) 初日

初日は、「日本の学校と現代史」を主題に、大学でのオリエンテーション後、公立中学校での見学とSCとの交流、大学生協での昼食を経て、靖国神社から昭和館を見学し皇居周辺を歩いた。

朝のオリエンテーションでは、NYIT 学生の来日から大学到着までの印象を聞き、東京の簡単な地理的特徴と江戸から現代への変遷、見学する各地域と学校の特徴などを教員から説明した。

NYIT 学生からは、言語が通じない国に来た不安感や、公共交通機関での静かさ、早朝から道路掃除をする住民など、日本人のマナーの良さへの驚きなどが多く語られ、来日そのものが大きなインパクトとなったことがうかがえた。日本人学生も、NYIT 学生の目を通して、あらためて日本の文化や地域の特徴に気づく様子だった。

中学校見学では、教室や学校図書館・体育館・プール・美術室等の専科教室など校内見学の他、

部活見学では部活動で登校した生徒たちと交流し、相談室見学ではSCとも交流した。不登校支援やいじめ防止はもちろん、特別支援教育を含む諸点について大変活発な質疑応答があった。NYIT 学生は、大学院生とはいえ、ほとんどが現役SCであり、それだけに実践的な質問が次々と出された。

大学生協での昼食体験の後、靖国神社を見学しながら、千鳥ヶ淵、昭和館の順に見学をした。大学からアクセスがよく、8月初旬で原爆投下や終戦の話題が多い時期であったことからこのルートとした。昭和館では、英語の音声ガイドを頼りに、第二次世界大戦当時の生活を体験できる展示や、米国立公文書館が所蔵する大戦直後のビデオ映像などを、皆、長時間にわたり熱心に見学していた。戦没者の分布や数、学童疎開など、当時の子どもの暮らしや戦後日本の出発点を知る機会となった。日本人学生にとっても初めて知ることがあり、外国人学生と共に、あらためて日本について気づくことが今回の授業の中心となることを感じさせた。

2) 2日目

2日目は、多文化理解の必要性について考える日とし、「Becoming a Culturally Competent School Counselor」と題した第二筆者 Dahir 教授の公開講座であった。遠方からも現役SCの方々が多数参加され、講演後には活発な議論が交わさ

れた。SC の多文化理解や支援についての議論が多く、日本の学校現場でも、海外にルーツを持つ児童・生徒への対応が増え、多文化理解スキルが求められていることを実感した。

3) 3 日目

3 日目は、「現代日本理解：現代日本の労働市場とキャリア教育」と題して、リクルートワークス研究所の協力で、東京駅近くのインテリジェントビルにあった同研究所（当時）に赴き、研究員の方から、非正規労働者の増加など日本の労働市場の動向と、近年のキャリア教育とその改革等について発表して頂いた。

初日の昭和館で見た往年の東京とは異なるモダンな東京都心部で、現在の日本が抱える課題を知る機会となった。米国の SC の 3 大支援領域のひとつはキャリア支援であり、キャリア教育やその背後にある労働市場の問題にも、NYIT 学生は興味をひかれたらしく、活発な質疑応答があった。

午後はそのまま上野へと移動し、上野公園の見学とした。博物館、動物園などそれぞれ興味に応じての見学となった。

この 2 日目、3 日目は、日本人学生には自由参加とし、NYIT 学生は土日の自由行動の準備も兼ねて、交通システムなどに慣れる期間になった。

4) 4 日目

4 日目は、「江戸から明治の変遷と現代の子ども若者理解」を主題に、午前中は江戸東京博物館を見学し、船で墨田川を浅草へと渡り、浅草寺周辺で自由に昼食。その後、御茶ノ水に移動して湯島天神等大学発祥の地を見ながら本郷界限へと本郷台地を登り、青少年プラザを訪問して、東京大学を見学して夕食という盛り沢山のコースであった。

江戸東京博物館では、事前に準備して英語のガイドツアーに参加した。細かい歴史には興味がない学生もいたが、江戸時代の東京の発展や、当時の暮らしなど、日本的な情緒を楽しむことができた。そのまま国技館を横切って、墨田川を船で渡り浅草へ。人混みだったが、自由行動で昼食と浅

草寺見学などをし、御茶ノ水駅へと移動した。御茶ノ水駅そばの明治の建築物ニコライ堂を見学する学生もおり、江戸から明治への変遷を肌で感じるコースであった。

青少年プラザとは、何度か事前に打ち合わせ、施設見学等だけでなく、双方に利点のある見学をと話し合った。結果として、青少年プラザで月に一回定例で行われている英会話イベントに、NYIT 学生が飛び入り参加する形で中高生と交流した。英語でのゲームを青少年プラザの英語インストラクターのリードで、NYIT 学生と日本人中高生とが一緒に楽しんだ。また、施設見学でも、NYIT 学生は積極的に来館中の中高生に英語で話しかけ、スタッフにさまざまな質問をしていた。施設見学後は、スタッフから、当青少年プラザを運営する NPO の事業内容や若者支援の内容等について発表を聞き、質疑応答を行った。青少年プラザでの子どもたちの姿や、家庭でも学校でもない第三の場で支援を行う NPO の話を聞き、日本の子ども支援に理解を深めた。その後、東京大学キャンパスを通り、学生街で夕食となった。

5) 5 日目

5 日目は、「日本のしきたりと世代差」を主題に、結婚をめぐるゲストスピーカーの話と、茶道体験を行った。

日本の結婚と家族の世代間差について、結婚を間近に控えた SC から結婚観の世代間差や、ワークライフ・バランスなど、自らの経験を踏まえた講話を聴いた。同世代の者、また、同じ SC として、結婚をめぐる明らかになる世代間・男女間の伝統やワークライフ・バランスへの意識の差について、日米の参加者ともに共感することがあったようで、国を超えた議論が盛り上がった。

午後はお茶の水女子大学が所有する茶室「芳香庵」にて、茶道部の協力を得て茶道体験をした。畳に正座する難しさや、珍しい和菓子、作法やしきたり、茶室の建築様式など、NYIT 学生にとっては、自国の文化とのあまりの違いに馴染めない

様子もあったが、貴重な体験となった。

また初日とこの日、最終日には、早朝に日本語講座を行い、日本語の文字の仕組みや簡単な会話などを日本人学生と NYIT 学生がペアになって学ぶセッションも行った。

6) 6日目

6日目は、午前中に大学で日本語講座やまとめのレポート作成などを行った後、午後は、新大久保コリアンタウンと、隣接するムスリム横丁、歌舞伎町を散策して、外国人居住者と日本人の交流や外国人居住者への生活情報提供などを行っている「しんじゅく多文化共生プラザ」を訪問した。

しんじゅく多文化共生プラザでは、同館の設置主旨や活動、外国人居住者数の変遷などについて講義を頂いた後、地域で外国人児童・生徒も含む子どもたちへの支援を行う近隣の SC や学校関係者からの講話もお聞きし、意見交流を行った。

マンハッタンでの異文化スキル授業と最も類似した形式の半日であり、現代の多文化化した学校での子ども支援という日米の類似性を感じる時間となったようだった。

3. 2016年夏のプログラムからの示唆

以上のように、2016年夏のプログラムは、大学外の活動が多く、2015年のマンハッタンでの異文化スキルの授業の内容を意識したものだった。

NYIT 学生にとっては、実際にさまざまな地域を訪れて、そこでの支援者と交流することで、異文化を多面的に体験できる機会になった。また日本人学生にとっては、そうした体験や NYIT 学生の反応などから、自分たちも気づいていなかった日本文化や東京の地域性等について新たな気づきを得る刺激の多い機会となったと考えられる。

しかし反面、見学等の体験から学ぶには、見学を通して何かに気づき、それを咀嚼し、意味づけ、次の実践に活かす各人の力が必要とされる。訪問先の数よりも、自分の疑問に答えてもらえる質疑応答や、学生相互のやりとり、寮や大学で周囲の

人に助けを求めながら短い期間であっても言語の異なる国に自ら生活してみる、ということの方が、“旅行”とは異なる授業ならではの学びに繋がりがやすかったようであった。その意味では、あえてキャンパス外に出かけなくとも、異文化体験を日米双方の学生が体験できる可能性は十分にあるという手ごたえがあった。

また、当然ながら、外部との交流の多い授業を組むためには、相当な準備や打ち合わせが必要であった。これまで交流のなかった青少年プラザの NPO やしんじゅく多文化共生プラザにコンタクトをとり、現地に赴いての協力依頼や事前打ち合わせをし、茶道部とも打ち合わせ、昭和館等への事前連絡、和菓子や入館料などの実費徴収と管理など、非常に多くの準備を行った。さらには成田空港から寮までの案内や、寮との打ち合わせ、寮での生活のサポート、寮に必要な寝具のレンタル予約支払い、JASSO 関係の書類や国際課・学生課との連絡、土日の国内移動や夕食のサポートなど、プログラム以前の生活支援のための準備も膨大であった。宗教や人種、年齢性別も異なる NYIT 学生には、食事等でも個別の対応が必要な場面が多く、ただでさえ集団行動に慣れていない米国人学生を街中で引率するのは容易ではなかった。マンハッタンでの授業を経験した大学院生の裏方としての協力や、快く受け入れてくださった青少年プラザ、しんじゅく多文化共生プラザ等の協力なしには行えない授業であった。JASSO の奨学金も NYIT 学生には励みになったが、追加採択であったため、採択決定からプログラム実施まで1か月半程しかなく、参加学生やプログラムの連絡調整に翻弄された。そうした事情もあって、全てのプログラムを通訳なしで実施したが、その点は、日本人学生も最初は戸惑いつつ、大きな問題もなく授業を行え、今後の英語による授業の可能性についても自信になった。終了後は、次回に備えて、プログラムと前後の準備等について、各種連絡先を含む英文の備忘録を筆者らで作成した。

4. 2018年夏のプログラム

翌2017年には、2016年と同様のプログラム実施をNYIT側と準備していたが、JASSOの採択決定時期が秋になり、日程確保が難しくなって中止とした。その経験を踏まえ、2018年夏には、奨学金の採択に関わらず、希望学生の人数が夏までにそろえばプログラムを実施することとした。

2018年夏のプログラムでは、当年のお茶の水女子大学側の科目が「学校臨床心理学特論」であることや、準備期間が短いこと、2016年の経験から訪問先は数より質と考えられたこと、などを考慮して、基本的に学内で、SCや学校臨床に関する事柄を日米で発表し合う形式とし、学外への訪問はお茶の水女子大学の授業とは切り離して、NYIT学生と筆者らのみで行うこととした。NYIT側でも、前回の経験から、集団行動が円滑になるよう女子学生のみを選抜し、事前のオリエンテーション等でも、集団行動や集団生活への意識づけ、寮のルールブックの確認など、前回以上に丁寧な準備が行われた。

2018年のプログラムでプレゼンの主題とした内容は表2の通りである。日米の学生が英語でプレゼンし、質疑応答の後、グループ討議を行う形とした。2018年度から公認心理師プログラムが開始されたこともあり、教育現場での課題やそれへ

の対応が、日米双方について理解できるように第一筆者が主題をあらかじめ選定し、第二筆者と内容の調整を行った。事前に両大学で、学生の分担を決め、スライド等の準備を行った。ただし、これだけでは、東京で日本文化に浸るというNYIT側の要請に不十分なため、表2の後半に示した学外でのプログラムをNYIT学生のみ行った。すなわち、2016年夏プログラムでも訪問した、青少年プラザ、しんじゅく多文化共生プラザ、リクルートワークス研究所、中学校の訪問である。博物館等の見学は、東京に慣れた第二筆者とNYIT学生で適宜行った。また、別日には、「School Counseling Models in Japan and in the United States」と題した第二筆者の公開講座も行った。

英語でのプレゼンテーションは、日本人学生には負担であることを懸念したが、留学等の海外居住経験がある学生も多く、英語に苦手意識のある学生は、そうした学生とペアを組むなどの工夫で心配も杞憂となった。若者らしく、日米ともに、パワーポイントの図表や写真、動画等の工夫もある力作の発表が続いた。双方の意欲的な取り組みが、学生相互の交流も促進した。

2016年夏にも感じたことだが、NYITから第二筆者が同行することで、学生にとっては、場所は日本であっても、自校での授業と同じ緊張感をも

表2 2018年夏プログラムの概要

	1限	2限	3限	4限
初日	オリエンテーション 日本語講座	日米の学校制度	日米の学校現場の課題	日米のSC制度
2日目	日米の学校生活の実際	日米のSC活動とSC役割	日米のSC資格	日米のSC養成教育
3日目	文化的所感：米国の文化的複雑性と文化的価値	日米の児童虐待	日米の特別支援教育	日米の不登校
4日目	日米のいじめ	日米の教師コンサルテーション	日米の教師との協働および保護者地域との連携	グローバル市民となる：まとめと討議
中間日	コリアンタウン 散策	しんじゅく多文化共生プラザ訪問	(移動)	青少年プラザ訪問
中間日	中学校見学	中学校見学	(夜間)リクルートワークス研究所訪問	

って授業に臨み、自然と熱心に取り組む姿勢が感じられた。実際、授業態度も含めて、第二筆者が指導を行う場面もあり、学生指導という面でも、双方の教員がいることで学びがあった。

各時限では、当該時限のテーマに応じて、15分から20分程度のプレゼンテーションを日米双方の担当者がそれぞれに行ない、質疑応答の後、学生ないし教員から話し合いのテーマが出され、日米混成の数名のグループに分かれて、討議を行った。その後、最後に全体での共有と質疑応答という形で各時限が進められた。

初日1時限目は、オリエンテーションを兼ねて、日本語講座で学生同士のコミュニケーションを図り、全体のガイダンスなども行った。2016年夏プログラムで作成した日本語講座用のパワーポイント資料などを活用できた。

2時限目以降は、表2に示したように、各時限のテーマは、日米双方の教育制度から教育現場での現代的課題、日常的な学校生活の在り方や特徴（ランチや学校行事など）、いじめや不登校対策、SCの養成制度や資格制度、SC養成カリキュラムの内容やSCの役割、教師コンサルテーションの実際など、学校現場での課題と対応、SCの在り方が学べるものであり、双方の学生にとっても関心の高いものであった。体系的にすべてのテーマを学ぶことで、日米の共通点や相違点、SCとして必要なこと、などについて、お互いに刺激を受けて、毎回活発なグループ討議がなされた。

日本人学生は、今回は修士の1、2年生であったため、学校臨床の経験も少ない学生が多く、教員から適宜補足説明を行ったが、NYIT学生の発表を聞いて、日本の現状についてさらに疑問を持つことができたり、新たに関心を抱いたりする様子が見られた。他方NYIT学生は、今回もほとんどがインターンシップ等でSC実践の経験者であった。そのため、NYIT学生の発表は、詳細かつリアリティがあり、自らの経験を踏まえた迫力ある発表であった。NYIT学生にはSC経験のない

日本人学生の発表がやや物足りない点もあったかと思うが、日本人学生は多いに刺激を受けた様子であった。ASCAモデルをどう学び、現場でどう動くのか、第一筆者にとっても理解が深まるプレゼンテーションであった。

また、学外の各機関への訪問は、2016年夏に次いで2回目であったため、準備も実行も比較的スムーズであった。

リクルートワークス研究所には、授業後の夕刻に訪問したが、研究所は銀座に移転しており、夜の銀座見学や終了後の新橋飲食店街見学など、東京の一端を知る機会にもなった。前回と同様に、労働市場とキャリア教育について、最近の動向を発表して頂き、質疑応答を行った。

しんじゅく多文化共生プラザでは、負担を考えてSCとの交流はせず、海外ルーツを持つ子ども支援の実践事例等について館長からお話を伺った。区内のある小学校で、海外ルーツを持つ児童と日本人の児童が、それぞれの保護者の交流機会を増やしたいと考え、子どもたち自ら保護者を招くイベントを企画して、保護者間交流を促した事例であった。日本に移住して子育てする外国人保護者には、小学校への心理的な敷居も高く、外国人・日本人ともに多忙とあって、パパ友・ママ友となる機会が少ない。そのことが、いっそう地域での子育てを難しくしていると小学生自身が考えて、国籍に関わらず、親子で楽しめる行事を企画し、各自の保護者を招いたのである。たくみに保護者同士を結び付ける子どもたちの力に涙する学生もおり、海外ルーツを持つ子どもへの支援について学ぶ大変有意義な時間となった。

青少年プラザでは、2016年夏と同様に、定例の英語イベントに参加した。フルーツバスケットなど簡単なゲームを、中高生の参加者と一緒に英語で行ったが、今回は、NPOの負担軽減もあって、NPOからのプレゼンテーションはせず、施設見学と質疑応答としたので、その分、ゲームに時間をかけてゆっくりと中高生との楽しい時間を過ご

すことができた。また、青少年プラザ併設教育センターの好意で、教育センターの施設見学や教育センターの役割についても学ぶことができた。

また、中学校見学でも、今回はSCとの交流を割愛したが、学校図書館の工夫に満ちたレイアウトや、廊下の進路関係の掲示物などから、次々と質問が出た。2016年夏には初日だった中学校訪問が、今回は最終日だったことで、2016年夏よりも、落ち着いてじっくりと訪問ができた。NYIT学生が訪問時にはすでに、日本の教育現場やその課題について授業から知識を得ていたことや、最終日ゆえに滞在中に学んだことをまとめながら、質疑ができ、有意義であった。訪問先の都合や暦の関係もあるので、プログラムを大学の都合で決めることは難しいが、プログラム全体の構成を考えて配置することも当然ながら重要と考えられた。

5. 2018年夏のプログラムからの示唆

このように2018年夏のプログラムでは、2016年夏の経験も踏まえて、なるべく無理なく深い学びができるよう、コミュニティ訪問型の授業とは異なる、学内での発表中心のプログラムとした。

特に、2018年夏のプログラムは、学校臨床やSCについての発表を4日間にわたって重ねていくことで、日米双方の学生にとって、文化理解の視点を広げると同時に、学校臨床やSC活動について、理解と思考を深めながら、昼食時も含めてより深い交流ができたことが大きな収穫であった。大学内での演習形式の授業を日米共同で行えたことは、今後の類似の試みにも示唆となると考えられた。部分的に日本語での補足説明は行ったが、4日間の学生の英語コミュニケーション力の向上はめざましく、大学内で長時間グループ討議を行ったことで、英語コミュニケーションスキルの訓練にもなり、予想以上の効果があった。

NYIT学生にとっては、大学内での討議、学外訪問先での質疑応答、自由時間の各自それぞれの興味に応じた東京（日本）体験、という3層で構

成されたプログラムであったが、自由時間を適切に用いることで、訪問先の少なさを補うことは可能であり、むしろ、学内で長時間にわたって日本人学生と交流できたことが、個人的な訪日旅行では得られない学びの機会となったようだった。

Ⅲ プログラムからの示唆

以上のように、2016年夏と2018年夏のプログラムは、NYIT学生にとっても日本人学生にとっても、自らの異文化体験を通して、人々の暮らしの背後にある文化の多様性とその意味、そうした社会文化的違いを背景にした子どもの支援ニーズやSC活動の違いと、文化差を超えた本質的な共通性について学ぶものであった。

第二筆者は、日本以外でも類似の国際協働による授業を経験している。その中で、今回の2つのプログラムを通じた示唆としては、最短でも2週間の滞在、2018年夏のプログラムのような、より深い文化的理解と対話を可能にするプログラムの重要性であった。2018年夏のプログラムでは、午前午後の発表と昼食で、日米の学生がアカデミックにもプライベートにも親しく交流できた。

2016年夏プログラムのNYIT学生からは、例えば次の主旨の感想もあった。“自分の傾聴スキルを最大限使い、それは友情を育む瞬間になった。共通点を実感し、違いも理解できた。日本人学生の社会への見方を知り、社会に対する新しい考えを学び、以前より文化に敏感になって街を歩けた。”

また、同様に2018年夏プログラムのNYIT学生からは、次のような感想があった。“日本人学生がより広い視点から学校文化を考え、それを変化させるアイディアに気づくことに貢献できたと思う。このことは、日本人学生が日本の学校で常勤のSCとして働けるようになったときにも役立つと思う”、“プログラムに参加して、移民の国というのがアメリカであり、そこには多様な文化ができていて、ひとつの基準を押し付けることは難し

いことにも気づいた。日本は、アメリカに比べて単一性の高い国であるため、考え方や価値や習慣が容易に国内に広がりやすいと思った”，“日本で初日を思い出すと、異国の言葉や食べ物や習慣に慣れ、全てを取り込もうとすることで、自分は消耗しきっていた。この体験は、新しく移住してきた子どもたちへのこれまでとは全く異なる新しい共感を私に育んだ。”

これらの感想、特に最後の感想に象徴されるように、自ら異文化と出会い、異文化に浸ることで、文字の上で学ぶ異文化理解とは異なる次元で、2つのプログラムは、海外ルーツを持つ子ども達の、見えにくい大きな困難や支援ニーズを、リアリティをもって理解する機会となったと考えられる。

学問的な学習と、体験学習のバランスをどうとるかは試行錯誤であるが、2018年夏のプログラムのように、学生間の交流を図りながら、異なる文化的な背景への理解を深め、合間に見学や訪問を行うことで、より深い学びが可能と考えられた。こうした国際協働による共同授業は、双方の大学の理解によって、学生にとって貴重な学びの機会となり、また、SC活動という点でも、子ども理解を支える貴重な体験と考えられた。SCの多文化理解スキルの向上には、履修した授業数も重要な要素と言われる(Pietranton, 2019)。少しでもこうした授業・体験は有効と考えられる。

本邦では、現役SCでも、カウンセリングやコンサルテーションの基本技能や学校でのSC活動周知など、いわばSC活動の入り口で課題を感じ、効力感を低下させてしまう例がある(伊藤, 2017)。他方、SC活動を体系的に学んだNYIT学生は、ASCAモデルを学習し活用できるから見通しをもってSC活動ができる、と自信をもって語っていた。2回の共同授業から感じることは、体系的な活動モデルに応じた体系的カリキュラムの重要性である。異文化へのイマージョンなど個々の授業における体験学習とSC活動が自然と結びつき、洞察に繋がるためには、インターンシップなど学

校現場でのSC実習だけでなく、実践の基盤となるSC実践に即した理論やモデルに基づく体系的学習が必要と考えられる。現在、臨床心理士プログラムだけでなく、公認心理師プログラムの長時間にわたる実習が行われているが、それを実践に繋がる洞察に満ちた学びとするには、活動モデルや理論の体系的な学びと、今回のようなダイナミックな体験による洞察や変化を含む授業の工夫が必要ではないだろうか。多文化理解や進路・学習などSC活動に必須な事項を含み、かつ、理論と体験を繋ぎ、気づきを促す体系的学習の工夫が、本邦でもますます求められていると考えられた。

文献

CACREP (n.d.). 2016 CACREP Standards.

Retrieved from <http://www.cacrep.org/wp-content/uploads/2018/05/2016-Standards-with-Glossary-5.3.2018.pdf> (September 23, 2019)

伊藤 亜矢子 (2017). スクールカウンセラーが燃え尽きないために学ぶべきことは何か②—スクールカウンセラー調査から得られた実践の課題— 心理臨床学会第36回大会発表論文集, 421.

伊藤 亜矢子・初澤 宣子・宮部 緑・菖蒲 知佳・Dahir, C. (2016). 米国のSC養成に学ぶ—ニューヨーク工科大学多文化スキル・サマーセミナーの体験から— お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要, 17, 77-88.

Pietranton, Z., & Glance, D. (2019). Multicultural competency training of school counselor trainees: Development of the social class and classism training questionnaire. *Journal of Multicultural Counseling and Development*, 47(1), 2-18.

Stone, C., & Dahir, C. A. (2016). *The transformed school counselor* (Third ed.). GB: Cengage Learning.